
宮崎県における普通水稻のイネ萎縮病の発生とその防除

永井清文・岩橋哲彦・後藤重喜
(宮崎県総合農業試験場)

最近、宮崎県においては普通水稻のイネ萎縮病の発生が特に増大し、黄萎病とともに稲生産阻害の大きな要因の一つとなっている。

その発生は従来の様相を異にし、本田移植後の後期感染発病が主体となり、普遍的なものとなりつつある。この原因はもとより最近のツマグロヨコバイの多発に起因するが、一方、現在における本病の防除は黄萎病と兼ねた防除であり、萎縮病防除対策上

最も重要である本虫の総体発生量の防圧、ならびに防除後の密度復元防止が不十分となっているためであるように思われる。したがって、イネ作季型の混交、ならびに冬期休閑田の増加などにより、ツマグロヨコバイの多発が恒久的となりつつある本県においては、従来の単なる薬剤散布のみでは十分な防除効果が期待できず、耕種環境の整備とあいまった新防除技術の確立が必要である。